

魏晉南朝文學に占める張華の座標

林 田 慎 之 助

端 書

西晉太康期の文壇に、陸機・潘岳・左思とともに活躍した詩人張華あざな茂先は、明人の張溥に「博物の君子」とよばれている。天文・地理・生物・音楽・方術にあかるかった此の百科全書派的學者は、同時にまた適確な鑑賞力と鋭い批評力をそなえ、當時の學識家・藝術家の有力な保護者ともなっていた。中世の堅牢な門閥制度のもとで、これを可能にした理由に、いまひとつ、彼の政治的地位の高さを無視することはできない。おそらく政治的存在としての張華を検討し評價する者は、その個人的閱歷がそのまま三世紀の間に興亡を告げる西晉王朝の歴史を象徴していることに基づくであろう。事實、非命に斃れる死の瞬間まで、その旺盛な濟世への意志は活力にみちた行動性をしめしていた。

晉書張華傳をみると「少くして孤貧、自ら牧羊す」といわれる孤獨な生立ちにはじまる彼の人生が、宰相の地位を獲得するまでには彼自身の努力と才能を認め、それを時宜にかなった社會的軌道にのせ、活用したさまざまな庇護者と幸運な機會に恵まれていたことがわかる。まず魏の驃騎將軍劉放に、その奇才をみとめられ、女婿に迎えられる

感婚賦を作ったのが十八歳。「鸚鵡の賦」によって、その文學的才能を阮籍が推賞し、魏の太常博士の官職に推舉されたのが二十三歳のときである。さらに張華は蜀において反旗を翻した鍾會征討に中書郎として加わり、奏議文を草してその才能を征討總司令の立場にあつた司馬昭から嘉せられた關係もあつて、魏から晉に政權が移行して以後も、そのまま晉の屬官となつてゐる。吳の征討發議にあつては、無視したい征討反對派の阻止にあいながら、晉の武帝の信頼をうけて、征討企畫の立案にあたり、もっとも強力にそれを推進實行して成功を収め、晉王朝の天下統一を可能にした功績により、關内侯に封ぜられている。西晉創建當初においても、張華が宮室制度・樂歌制定・古籍蒐集整理に盡力した功績は大きい。その後、張華は反目派の讒言で左遷されるが、彼の聲譽は朝廷の内外にますます高く、元康年間、司空となり、危機に瀕していた西晉王朝の再興につとめることになる。

このとき、すでに西晉國家の運命は愚凡な惠帝のもとで、淫虐をきわめた賈后とその外戚の專横にゆだねられ、内政は疲弊弛緩し、外政は北方胡族の侵害にまかされていた。晉書の歴史家は、この間に果した張華の役割について、「華は遂に盡忠匡輔し、彌縫補闕す。閹主虐后の朝に當ると雖も、海内晏然たるは華の功なり」(晉書張華傳)と、告

げている。このような張華の懸命な政治的努力にもかかわらず、彼の憂慮をこえて、趙王倫と佞臣孫秀のクーデターが引き起される。この反亂が導火線となり、八王の亂が興り、ついに西晉王朝は決定的な自滅の道をたどる。反亂軍は當初、聲譽高い張華を一度は味方にひきいれようと工作するが、ききいれられず、かねてより私怨を抱いていた孫秀はすぐさま張華を捕え、賈氏一族とともに、その政治的責任をとうてい殺害する。時に永康元年（三〇〇）、張華六十九歳の四月であつた。

西晉興亡史を象徴する存在として張華をみるのはこの意味であるが、この論稿の意圖は現存する彼の作品をてがかりに、その思想と文學に密着しながら、魏晉南朝文學に占める張華の座標を検討することにある。便宜上、第一章から第五章にわたって論及するが、第一章の鶴鶴の賦、第四章の情詩の系譜、第五章の遊俠樂府の世界では、専ら思想的・文學史的觀點から時間的な縦の座標をさぐり、第二章の博物の記録と第三章の西晉文壇の形成では、張華が生きた状況との對應のなかで、空間的な横の座標をたしかめ、従来ともすれば、文學史の上で低い評價をうけてきた張華の位置づけを、あるべき正當な姿に復元できればと考えている。

一 鶴鶴の賦

鶴鶴の賦が、張華の人と文學のなかで占める比重はきわめて大きい。のちほど詳細に觸れるつもりであるが、この賦は第一に、魏晉時代の社會状況を鋭敏に反映した知識人の思想、より正確に云えば、政治權力の歸趨が人間の在り方に複雑微妙に關りあつてくる際にあらわれてくる轉向の問題が展開されており、郭象の莊子注釋などとも

に、この時代の思想の動向を考えるうえに、重要な資料を提供していること、第二に、この賦が阮籍によつて「王佐の才なり」という評價をうけて、張華がはじめて世に名をあらわす機縁がつくられたことなどが、その理由である。

第二の理由について、晉書張華傳には、「初め未だ名を知られざりしに、鶴鶴の賦を著して自ら寄す。……陳留の阮籍は之を見て歎じて曰く、王佐の才なりと。是れに由りて聲名はじめて著れ、郡守鮮于嗣は華を薦めて太常博士と爲す」と記されており、時に魏の正元元年（二五四）、阮籍四十五歳、張華二十三歳である。張華は後に西晉王朝の補弼の重臣として活躍するようになるのだから、この晉書の挿話はあまりにできすぎているといわねばならぬ。ところで、「鶴鶴の賦」の制作年代に關して別の異説がある。それは文選李善注引臧榮緒晉書張華傳にみえるもので、「張華字は茂先、范陽の人なり。少くして文義を好み、墳典を博覽す。太常博士と爲り、轉じて中書郎を兼ね。雲閣に栖處すると雖も、慨然として感ずる有りて鶴鶴の賦を作る」（李善注文選卷十三）という記事である。これによれば、張華が魏の中書郎になつて以後となり、略張華三十三歳（二六四）以降に、その制作年代をおいていることになる。この時は、すでにその前年の景元四年に阮籍は世を去つており、晉書本傳の記事の挿話とあきらかに矛盾し、「鶴鶴の賦」を通しての阮籍と張華との邂逅は考えられぬことになる。いま、此の二つの制作年代の當否は、決定的な資料の提出をみぬかぎり、どちらとも判定できない。唯、晉書本傳の挿話があまりにできすぎた歴史家の虚構ではないかという疑いを差しはさむ立場を、臧榮緒晉書が補強していることだけは確かである。

さて、阮籍・張華を魏晉思想史のうえからみると、阮籍が所屬する

魏末竹林の七賢の集團と、張華が深い關係をもつこととなる西晉貴族の集團との間には、清談の性格内容におおはばな落差をみとめねばならぬ。この落差を要約すれば、前者が禮教思想を拒絶し、後者がそれを容認する態度をとっていることである。嵇康・阮籍の清談が思想的立場をこえて、後漢末黨錮の禁で清節な儒學の徒が示した俊烈な現實批判の精神に相い通じ、西晉元康期に亂髮裸袒して飲酒談笑にふけた王澄・胡毋輔等の放埒を清談と似て非なるものがあるのは、この點にかかつている。魏晉政權交替期に荀氏・鍾氏・王氏・衛氏など漢代以來の儒學の名門を、政治集團として總結集し、政權の自己收奪をはかる司馬氏は、事あるごとに禮教思想の遵守を提唱し、儒家的名分論を動員しているが、¹⁴⁾阮籍等の文學集團にとつて、それは精神の形式主義であり、血を美名で洗う虚偽にしかうつらなかつた。それ故に、彼等は禮教思想を徹底的に拒否する任誕放達な思想行爲のなかで、老莊の哲學にもとづき、内面の自然にかなつた自我の確立にとめたのである。阮籍の通老・通易・通莊の三論、大人先生傳、嵇康の釋私論・管蔡論・聲無哀樂論・難自然好學論は、このような具體的な現實とのかかわりのなかで構築された思想の論理であり、抽象的な空論ではなかつた。

これにたいして、裴頠・樂廣等に張華を含めた西晉官僚・貴族の清談は、儒教遵守の司馬氏の政治體制に繰り込まれ、その社會秩序と妥協した結果、名教禮法と自然清超を尙ぶ老莊的氣風との奇妙な婚姻關係の上に成立していたのである。晉書樂廣傳をみると、樂廣が竹林清談集團の亞流にしかすぎぬ王澄・胡毋輔等の放埒な清談行爲にたいして、「名教の内、自ら樂地有り。何ぞ必ずしも爾せんや」と嘲笑しており、更に晉書裴秀傳をみると、西晉言談の叢林と稱せられた裴頠が

崇有論をあらわした著作動機について「頤深く時俗の放蕩にして、儒術を尊ばざるを患ふ。何晏・阮籍は素より高名世に有るも、口談浮虚にして、仕へて事を事とせず。王衍の聲譽太だ盛んにして、位高く勢重きに從つて、物務を以て自ら嬰らざるに至つては、遂に相ひ放効し風教陵遲す。乃ち崇有論を著はして以て其の蔽を釋く」と記している。この二つの資料は西晉貴族の清談が禮教思想を容認し、儒家的色彩を濃厚に帯びてきた事實を證據だてるものである。かくして西晉の政治體制に順應した西晉官僚・貴族の清談には、嵇康・阮籍等にみられた眞實なるものへのひたむきな追求と、現實批判の熾烈な氣魄は影をひそめ、しだいにそれはサロンのな遊びに變質してゆくことになる。

彼等の清談がサロンの雰圍氣のなかで、如何に美しく氣のきいた思辯の展開を競っていたかを、最もよく傳えているものに、世説新語言行篇の記事がある。

諸名士共に洛水に至つて戯れて還る。樂令(廣)は王夷甫(衍)に問ひて曰く「今日の戯むれば樂しかりしか」と。王曰く「裴僕射(頤)は善く名理を談じ混混として雅致有り。張茂先(華)は史漢を論じて靡靡として聽く可し。我と王安豐(戎)は延陵・子房を説いて亦超超として玄著なり」と。

この記事のなかで頗る興味を引くのは、琅琊の王氏、河東の裴氏といつた西晉清談貴族の領袖たちと伍して、寒門出身の張華が登場し、堂々と論陣を張っていることである。洛水のとおりで、史記・漢書を論じるこの張華の颯爽たる清談家としての面目のなかには、次にのべる様な、かつて魏晉政權交替期に「鶴鶴の賦」で表明した狀況にたいする危機と不安の意識、自己の生存そのものにたいする悲哀の凝視を

微塵もさがすことはできない。

ここで少しく「鶴鶴の賦」について検討することにする。この賦の序をみると、

鶴鶴は小鳥なり。蒿菜の間に生れ藩籬の下に長つ。尋常の内に翔集し生々の理足る。色浅く體陋しく、人の用を爲さず。形微にして處卑しければ、物之を害すること莫し。族類を繁滋し、乘び居り比び遊び、翩翾然として自ら樂しむ有り。彼の鶯・鶉・鷓鴣・孔雀・翡翠は、或は赤霄の際を凌ぎ、或は絶垠の外に託けり。翰く擧ることは天に冲るに足り、蹇跂は以て自ら衛るに足る。然れども皆増を負ひ、織に纓り、羽毛は貢に入る。何となれば人に用あればなり。

これを讀めば、張華が陋劣卑小な鶴鶴の存在に積極的な寓意を發見した理由がわかる。それは鶴鶴と對照的に美羽と偉大な飛翔力を具えた鳥が増を負ひ、織に纓り羽毛は貢に入る不安と恐れにさらされ、おびやかされる現實があるところからきている。このように生きることの不安と恐れを意識は、魏晉政權交替期の状況、即ち晉の司馬氏が魏の曹氏から帝王權を篡奪する過程で、暗殺とクーデターが相いついで引き起されるけわしい時代状況を反映したものである。さらに、鶴鶴賦制作年代について兩説あげておいたが、假りに晉書本傳の二十三歳説をとると、それまでに曹爽事件からんで、何晏・鄧颺等の著名な清談思想家が誅殺されている。また臧榮緒晉書の三十三歳説をとると、事態はいっそう險惡となっており、魏の重鎮で清談の領袖的存在であった夏侯玄・諸葛誕・魏の名將毋丘儉、魏室の高貴卿公、竹林清談集團の思想家嵇康・呂安がつぎつぎに、司馬氏の手で殺害されている。いずれの制作年代をえらぶにしろ、張華は感受性の最も強い時期に、

このような事件を目のあたりに経験しなければならなかったこととなる。當然、張華はこれらの一連の事件を自己の生き方の問題として繰り込み、切實な反省の契起とせねばならなかったと思われる。

鶉鷓・鶉鷓・鷓鴣・孔雀・翡翠・晨鳧・歸鴈等の大鳥が美しい翼と、豊かな肌を持つ故に、罪無くして殺戮せられ、蒼鷹は猛き志を、鷓鴣は恵い智をそなえるために捕獲せられる、とのべる「鶴鶴の賦」の本文の寓意には、その時代、優ぐれて美なるものが否定されるという暗い状況が暗示されている。この背景があつて、「鶴鶴の賦」の主題として、相對的な充足と小さな自己安住を求める小宇宙の思想が普遍的な論理性を具有して定着をみたのである。

状況を擬子にして、本來消極的な存在を、積極的な自己主張に切り換える非連續の論理は、「鶴鶴の賦」では「鷹・鷓すら過ぎて猶翼を俄くるに、(鶴鶴は)尙何ぞ置爵を懼れんや」という表現に象徴的にとらえられている。置爵とはおそらく外から掩い迫る暗いからを暗示する詩語であらう。同時代の何晏の詩に、「雙鶴翼を比べて遊び、群飛して太清に戯むる。常に恐るるは網羅に入り、憂禍一旦に并ざるを」(擬古)とあり、阮籍には「天網は四野に彌り、六翮は掩はれ舒ず」(詠懷詩其四十一)とあり、嵇康の詩にも、「何ぞ意らん世に艱み多く、虞人我に來りて維ぐを。雲網は四區を塞ぎ、高羅正に參差たり」(五言古意一首)、「坎壈みて世務に越くに、常に恐る網羅に纓るを」(五言三首答二郭)とみえる。これらはその一例にすぎぬが、ここにつかわれている網羅・天網・雲網・高羅・羅罽等の詩語は置爵とおなじく、自由天翔けんとする飛鳥をおびやかす、阻止する悪のイメージをもつ。これらはいくらか、魏晉政權交替期の詩人に共通してあらわれた危機意識の表現であるとみることができよう。

この生きがたい不安におののき、阮籍の言葉をかきれば、薄氷を踏む思いで生きていた知識人が、おのがじし相對的な自足の境地に安住を求めた思想的傾斜をもつていたにしても、いっこうに不思議ではなかつた。例えば同時代、莊子に註釋をほどこした郭象の思想にも、阮籍詠懷詩の複雑な性格のなかにも、そのような小宇宙の思想を發見することができる。莊子の逍遙遊のなかでは、鸞鳩は榆や枋の梢をめがけて飛びつこうとするが、達することができず、却つて偉大な飛翔力をもつ大鵬を冷笑して自分の無智無力を覆い隠そうとする卑小陋劣な存在としてあつかわれている。ところが、郭象の註釋によると、「苟も其の性足りれば則ち大鵬と雖も、以て自ら小鳥（鸞鳩）より貴しとする事無し。小鳥も天池を羨むこと無くして榮願餘り有り。故に小大殊なると雖も、逍遙一なり」（郭注莊子卷一）となつており、相對的な自足の境地では、大鵬も鸞鳩も同格同列であるとみなしている。この他、阮籍の詠懷詩にも、樹枝に棲む鶴鶴、蓬蒿に集う斥鴳を、鸞鳩の存在にかさね、これと對照的な海鳥（大鵬）の莊子寓話を素材にして、郭象と全くおなじ思想的傾斜を表白した詩歌がある。

鸞鳩飛桑榆

海鳥運天池

豈不識宏大

羽翼不相儀

招搖安可翔

不若棲樹枝

下集蓬艾間

上遊園圃籬

但爾亦自足

鸞鳩は桑榆に飛び

海鳥は天池に運る

豈に宏大なるを識らざらんや

羽翼相い儀せず

招搖して安んぞ翔くべけん

樹枝に棲むに若ざるなり

下は蓬艾の間に集ひ

上は園圃の籬に遊ぶ

但爾くまた自ら足るれば

用子爲追隨 子を用つて追隨を爲さんや

末尾の句の、子は海鳥を指すとは黄節の註（阮籍詠懷詩其四十六）。大意は人鸞鳩とて、大鵬が羽搏く世界の宏大さを知らないわけではないが、なにしろ翼の大きさではくらべものならぬ以上、招搖などよして樹枝に棲み、それなりの境地で遊び樂しむがよい。このように自ら足りておれば追隨など問題にならぬ。勿論、阮籍の詠懷詩八十二首の全貌をみるに、この詩は阮籍の内部で進行していた複雑な思想的葛藤を構成する部分にすぎない。ところが、張華の場合は、その小宇宙の思想が「鶴鶴の賦」の主題として、全面的に展開されているところに、極めて特徴的な問題を含んでいる。

惟れ鶴鶴の微禽なるも、生を攝ひ氣を受け、翮翮の陋體を育ひ、玄黄の以て自ら貴くすること無し。毛は器用に施さず、肉は俎味に登らず。鷹鷂は過ぎて猶翼を俄くも、尙何ぞ置爾を懼れんや。翳翳蒙龍たれば是れ焉に游集し、飛んで飄颻せず、翔けて翕習せず。其の居は容れ易く、其の求めは給し易し。林に巢ふこと一枝に過ぎず、食ふ毎に數粒に過ぎず。栖むも滯る所無く、遊ぶも盤む所無し。荆棘を陋しまず、蒨蘭を榮とせず。翼を動かして逸ぎ、足を投じて安んず。命に委せて理に順つて、物と思ふこと無し。伊れ茲の禽の無智にして、何ぞ身を處するの智に似たる。

阮籍・張華・郭象等、魏末晉初の清談思想家に共通してあらわれているこのような小宇宙の思想史的傾向、一切の對象を相對化の思惟においてとらえ、たとえ陋劣卑小な存在であっても、それなりの自足安住の境地にあって生きたいと希求し、それを積極的に肯定する論理は、同時に不安と危機にみちた魏晉の政治的轉換期に生きねばならぬ。

かつた知識人の悲哀と苦惱の表現であつた。

劉勰は文心雕龍才略篇で、鶴鶴の寓意は韓非子の説難にあると批評している。⁶⁾この點からみると、劉勰は魏晉政權轉換期の状況を踏まえて、自己の命がいつなんどき奪われるかもしれぬ危機の豫測の上について、對象の心理の運動を洞察しながら、巧みに自己の論理を對象に貫徹させる説得の難さについて、くどくどと語つた韓非子の法家的論理を「鶴鶴の賦」に読みとつてゐるのである。この批評と關連して、阮籍の「王佐の才なり」という評價もまた、これが事實あつたとすれば、いちはやく劉勰と同じく法家的論理の系譜の上で、「鶴鶴の賦」の論理をとらえ、さまざまな危機をきりぬけて自己の論理を貫徹することを必要とする補弼の才能を洞察した卓見であつたと思われる。

しかし、このように「鶴鶴の賦」の寓意が韓非子の説難の論理を繼承し、その論理にのせて、一切の對象を相對化し、それなりの存在の中で自足安住をはかる老莊的小宇宙の思想を展開したところに、張華が魏末の嵇康阮籍の反體制思想と訣別し、俗流との結託をおこなわねばならなかつた素因をはらんでゐたといえる。あらためて「鶴鶴の賦」を魏晉清談思想史の上で位置づけると、危機意識の點では、嵇康・阮籍と共通性をもちながら、その小宇宙の思想のうちには、やがて司馬氏の儒教體制の内に吸収され、唯洛水のほとりで、優美で氣のきいた思辯の展開を競う西晉官僚・貴族の流俗清談に、轉化してゆく必然性を認めねばならぬ。この意味で、張華の「鶴鶴の賦」は魏晉という政治的思想史的轉換期におけるきわめて象徴的な作品であつたといえる。したがつて、「鶴鶴の賦」の制作年代を咸寧緒説にとり、たとえ晉書張華傳の、阮籍がこの賦をみて王佐の才なりと批評した挿話が虚構であるにしても、「鶴鶴の賦」を焦點にすえ、阮籍と張華との思想史

的邂逅と乖離、接近と斷絶を象徴的にとらえ、そこから魏晉時代相の眞實に迫ろうとする氣鋭な史眼を、この挿話に讀むことができる。

二 博物の記録

泰始の年號ではじまる西晉の建國當初、張華は拔群の學識をそなえた文官として、縱横な活躍振りをみせてゐる。泰始三年（二六七）、三十六歳の張華を黃門侍郎に任じた詔書を見ると、はやくも、彼は「圖書を博覽し、四海の内諸を掌に指すが若し」（王隱晉書北堂書鈔五八）と賞讃をうけていたことがわかる。現在、そのような張華の事蹟に關して拾えるかぎりの記事をまとめれば、ほぼ左の如くである。

I 泰始初年、晉の宮室制度の確立にあつて、漢代の制度を參考にしようとする武帝の意向にこたえ、その制度について建章千門萬戸に及ぶまで、圖指するがごとく明瞭且つ流暢に具申していること。（世說新語言語篇注引晉陽秋）

II 泰始五年、晉室の行禮樂歌の制定について、太僕の傅玄、中書監の荀勗とともに正月行禮及び王公上壽酒、食舉に用うる樂歌詩の制作に従事。その際、古樂歌と曲調の關係にふれて適切な進言を行つた。（晉書禮樂志）

III 泰始六年、荀勗とともに、劉向の別錄によりながら、歴代古籍の蒐集整理につとめてゐる。（晉書荀勗傳）

これだけの記事からも、寒門出身でありながら、廣汎な學識を身につけた張華が、それを存分に活用し、西晉政治舞臺に躍り出てゆく經緯をほぼ窺うことができるであろう。とくに、IIIの歴代古籍の蒐集整理の作業は、張華の博物志四百卷の編輯制作と密接な關連を豫測させるものがある。姜亮夫の「張華年譜」が咸寧三年（二七七）に制作年代

をおく、此の博物志も、また彼の政治的地位の飛躍に必要な跳躍臺であつたと思われる。このことは、王嘉の拾遺記に「張華字は茂先、挺生總慧の徳あり。好んで秘異圖緯の部を觀て、天下の遺逸を摺采す。書契の始めより神怪を考驗し、世間閭閻の説く所に及び、博物志四百卷を造り、武帝に奏す」(百子全書六五)と記されており、天下の遺逸の摺采は歴代古籍を蒐集整理したこと、博物志四百卷を武帝に奏上したことは讀書力と學識の博大さを誇示する意圖と、いづれも符節を合しているからである。博物志四百卷をみた武帝は「卿の才は萬代を綜ぶ。博識は倫ふ無し。遠くは羲皇に冠むり、近くは夫子に次ぶ」(同上)と絶讚し、唯餘計なことに、怪力亂神を理由に、浮妄浮疑の部分を刪定して十卷となしたと傳えられている。

同じ十卷本博物志についても、六朝及び唐代に傳わつていたそれと、現存するそれとの間には體裁上相當のへだたりがあることは、つとに四庫全書提要の指摘するところである。それによると、裴松之の三國志注、江淹の古銅劍贊、王溥の唐會要、張彥遠の歴代名畫記、李善の文選注、更に太平御覽等に殘存する博物志の記事が、現存する博物志の内にもられない點を詳さに考證し、原書は既に散佚していたので、後世の好事家が大戴禮・春秋繁露・孔子家語・本草經・山海經・拾遺記・搜神記・異苑・西京雜記・漢武內傳等の諸書より剽掇し、一書を編み、盡くは原文ではあるまいと論じている。確かに、燕の太子丹の條り(百子全書本卷八史補)は、漢代に先行した燕丹子から抜き取つて要約したものであり、あきらかに剽掇の一例である。しかし博物志制作後に成立した搜神記・拾遺記・漢武內傳・漢武故事等に、現存する博物志所收の故事説話と同内容のものがある場合、提要の云う如く博物志を再編成した好事家の剽掇と必ずしも云つてしまえるかどうか。

か。例えば、西王母が漢の武帝に仙藥を授ける場面をのぞきみる東方朔の話(百子全書本卷八史補)は漢武內傳の同内容のものより、或は劉方石の千日酒の説話(百子全書本卷十雜説)は搜神記の同内容のものより、素朴な記録性を帶び、助辭の使用も少く、その敘述の文體は相當に古いと推測される。この點から流布本博物志のなかには部分的に原博物志の偲げをとどめるものがあるともみることができ、この種の方法は、原博物志を檢討する書誌學的な一つの操作にすぎないので、これだけを證據に、原博物志の偲げを論ずることは危険である。一方、後世の好事家の再編成を経たとみられる流布本博物志をもつて張華を語ることは無論できない。

唯、流布本博物志十卷の大部分が神仙・仙藥・仙域・方士・方術の記事で埋められていることは興味ぶかい。なぜなら、張華の詩篇に美しい仙域を想像的に描いた游仙詩三首があり、更に晉書張華傳其他の書を見ると、「多く圖緯方伎の書に通じ、詳覽せざる莫し」と、張華を語り、彼の思想と生活の方法が、方術の性格を帶び、奇異不可思議な現象世界に方士的な接近を試みている挿話が澤山傳えられているからである。其の一、二を左にひこう。

○魏の時に殿前の鐘忽ち大鳴し、省署を震駭す。張華曰く「此れ蜀の銅山崩れし故に、鐘鳴之に應づ」と。蜀にて上事を尋ぬれば、果して銅山崩ると云ふ。時日、皆華の言の如し。(太平廣記一九七引小説)

○陸機嘗つて華に鮓を餉る。時に賓客座に滿つ。華器を發いて便ち曰く「此れ龍肉なり」と。衆未だ信ぜず。華曰く「試みに苦酒を以て之を濯へば必ず異有り」と。既にして五色の光起る。機還りて鮓主に問へば、果して「園中茅積下に一白魚を得たり。質狀

常と殊る、以て鮓と作せば美に過ぎたり。故に以て相獻ず」と云う。(晉書張華傳)

○吳郡の臨平の岸崩れ、一石鼓出づ。之を打てども聲無し。以て華に問ふ。華曰く「蜀中の桐材を取つて刻みて魚形を爲るべし。之を叩けば則ち鳴る」と。即ち華の言に従へば聲數里に聞ゆ。

(太平廣記一九七引小説)

これらは、如何にも荒唐無稽な話ではあるが、注意して讀めばそこには、或る人物の描き方、對象への迫り方、逸話傳承の興味のあるところとその様式を含めて、中世という時限での獨自の個性認識がある。いくつかの張華をめぐる逸話傳承は、いずれも共通して其の該博な知識、即物的で自信にみちた鋭い解析力、その上に組み立てられた深い洞察と的確な豫言判斷等、總じて方士の教養と認識の驚異的な顯在についてのべている。事實、この種の教養と認識を有効に活用することで、寒門出身の張華は彼自身の政治的地歩を確實に固めていたのである。そしてまた、この方士の教養と認識の結晶が博物志四百卷の編輯制作となつてあらわれ、武帝に奏上されて絶讃を浴びることになる。

張華がこの博物志四百卷を編輯制作した意圖は、武帝奏上の事情からおして、博大な自己の學識・讀書力の誇示欲と、それにとまなう文官官僚としての上昇意識にささえられていたことは確かであるが、同時にそれは説話雜録を含む類書編纂の方向にむかっていたのではないか。それについて、まず博物志という題名、四百卷という巻數、それから隋書經籍志では、博物志を中國類書の嚆矢といわれる魏の繆襲撰「皇覽」とともに、雜家卷三に收められているなど頗る暗示的である。流布本で最も古いとみられる宋の連江葉氏本博物志を校刻した黃

丕烈は、「予が家に汲古閣鈔宋本博物志有り。末題に連江の葉氏と云ふ。今世に行はれる所の本と夤然同じからず。嘗つて取つて之を讀む。乃ち茂先の此の書は大略戴籍を撮取する所と知る。故に自來目錄には皆之を雜家に入る。其の體例の獨創は則ち撮取する所の書に隨ひて部別を分ち相ひ雜則せざるなり。卷首に地象畢方を括し、繼ぐに考靈曜を以てするが如きは是れなり」(士禮居黃氏叢書貞)とのべ、宋本博物志の體裁が類書の體例にそつている點に、その獨創性を認めている。

さて、後漢末から三國動亂を経て一應の安定期をむかえた西晉時代に、散佚していた古籍を整理し、それを總集或は類書のかたちに編纂する作業があらわれてくるのは、文化史的動向として當然の歸趨であった。張華が蒐集した古籍などを基底にして、古の文章を類聚區分して、中國最初の總集となつた文章流別集三十卷が肇虞によつて編纂されたり、抱朴子の殘闕文のなかで、張華と共に通人(博覽多識の士)と稱せられている左思は三都賦をあらわし、魏・吳・蜀の都に於ける歴史・地理・風俗を事實に即して描いたそれが、當時にあつては類書として洛陽の紙價をたかからしめたといわれるのも、この一連の文化史的動向を物語るものであった。張華の博物志四百卷という龐大な書物の性格に、歷代志怪・説話・雜錄本の記事を撮取し、それに當時の民間傳承から採集したものを加え、それらを各々の部類に分別し、この分野に於ける類書編輯制作の企圖があつたとみても、いっこうに不思議ではあるまい。前にあげた王嘉の拾遺記の「好んで秘異圖緯の部を觀て、天下の遺逸を掇采す。書契の初めより神怪を考驗し、世間閭閻の説く所に及び、博物志四百卷を造り、武帝に奏す」という記事をこのような西晉期における書誌再編成の文化史的動向の一環として把握すれば、これは極めて貴重な資料を提供しているといえる。おそらく

儒教を國是と定める政治的配慮からでたと推察される晉の武帝の刪定が、もしなく、四百卷そのままが傳えられていたならば、「未だ聞かざる所に驚き、未だ見ざる所を異しむ」(王嘉拾遺記)と武帝を嘆かした博物志の豊富多彩な記事は、その素材の提供という意味だけに限っても、六朝以後の志怪説話にあたえた影響と便宜には計りしれぬものがあつたにちがいない。

三 西晉文壇の形成

西晉太康期の文壇で活躍した詩人・文學者は数多い。なかでも、陸機・潘岳・左思・摯虞はその代表的な存在である。陸機・潘岳は南朝文學の誕生期にふさわしく、洗練された形式をそなえた華麗な抒情詩の詠い手として、左思は太康期の貴族文學のはなやかさの外にあって、獨り自己の志を野性のあらあらしい美しさに結晶させた詩人として、また摯虞は文章流別集三十卷という總集を編み、その各篇に論評をくわえた文學理論家として、各々太康期の文壇を構成する大きな柱とみなすことができる。代表的とはその意味であるが、この他、陸雲・潘尼・張協・成公綏、そしてこの張華など西晉文壇を形成した華々しい存在であつた。

西晉太康期の文學といえば、必ずといってよいぐらい、陸機・潘岳・左思・摯虞に照明をあてるのが、文學史家の常識である。唯、しかし現在もし張華の存在を無視して、この期の文壇形成を語ろうとすれば、たちまちその端緒において、その意圖は挫折するにちがいない。更に、もし張華の存在がなかったならば、陸機・左思・潘岳・摯虞が太康期の文學を代表するかたちでは、西晉文壇の形成はなかつたであろう。したがつて、そうであるとすれば、この期の文學現象は全く活

氣の乏しいものになるか、全く違つた様相を呈していたであらうと想像される。つねに文學史の上で、西晉文壇の一隅に位置づけられてきた張華はそれほど意外に大きな存在であり、その意味でも、これまでの張華にたいする文學史家の固定した偏見は是正されねばならぬ。この章では、このような視點から、西晉文壇に活躍した詩人・文學者の群と張華との人的交渉、それに附隨する文學的交流にふれてみたい。

さて、張華の傳をみると、「華は性、人物を好み、誘進して倦まず。窮賤侯門の士に至りては一介の善き者有れば、便ち咨嗟稱詠して、之が爲に譽を延ぶ」(晉書)とある。「性、人物を好む」とは張華の個人的性格に歸納する評語である。當時、劉毅尙書左僕射が上疏して「上品に寒門無く、下品に執族無し」といつているほど、動脈硬化していた九品中正制度が、なお晉朝官僚機構をささえる支配的な原動力であり、豪族門閥を除くほかは、たとえ有能であつても、よほどの幸運に恵まれない限り、寒門出身の多くは、官僚としてその才能と志を政治の場で開陳させる望みを失つていた。窮賤の身であるがために、優れた人物が社會の下層部に沈澱せねばならぬ社會制度のなかで、張華がその人々を埋没から發掘し、積極的に朝廷にたいする推挽の勞を惜まなかつたのは、唯單に彼の個人的性格の好みによるものではあるまい。そこにはより強く彼自身の屈折した閱歷が心理的に作用していたと考へる方が妥當であらう。つまり、牧羊から身を起し、劉放・阮籍・盧欽等¹⁶⁾の僥倖な邂逅によつて、世に出る機縁をつかむことができた複雑な、それでいて恵まれた彼の人生の軌跡が、寒門不遇の士に同情をむけ、才能見識を具えた人物を、進んで發掘し推舉する態度にむかわせたのである。

文學者でいえば、成公綏・左思・束皙が寒門出身者であるにもか

わらず、西晉貴族文學者に伍して、その名聲をとどめえたのは、張華の推賞に依るところが大きい。蜀平定の際、閻纘・陳壽、西晉統一後では、吳の陸機・陸雲・顧榮、褚陶などが、北方人士の根強い蔑視のなかで晉朝官僚組織に繰込まれてゆく際、不利な立場にありながら、いずれもしだいに各々の才能を開花させ、相當高い官職を獲得するに至るまでには、當初張華の無差別な庇護と温い推挽を受けることができたからであった。

元康六年（二九六）、張華が司空の重責を荷い、行政を總括する立場におかれて以後になると、晉室中興の使命感が、彼に天下に遺散している隠れた人材の登用にむかわせた事實がある。晉書隱逸傳にのこる陳留の范喬あざな伯孫の傳記をみると、「時に張華は司徒を領し、天下の擧ぐる所凡そ十七人。喬に於て特に優論を發す」とあるのがそれである。晉書忠義傳に收める平陽の韋忠あざな子節の傳記に、「裴頠、平陽の韋忠を華に薦む。華之を辟くも、忠辭して起たず」とあるのも、その頃の事である。同じ頃、後に東晉の大將軍となり、大いに活躍することになる鄱陽の陶侃あざな士行も、吳滅亡後孝廉にあげられてから洛陽に至り、しばしば張華をたずね、遂にその知遇をえて郎中に敘せられている。その模様を世說新語・言語編注引陶氏敘は「陶侃は少くして遠概、宇宙を綱維するの志有り。洛に入り、司空張華見て之に謂ひて曰く八主を匡け民を寧んずるは君其の人なり」と傳えている。これらの推擧はいずれも張華の司空在任當時のことで、この時すでに權力を掌握していた賈后及び其の一族による専制的暗黒政治は晉室王朝を衰退顛覆の危機にさらしていた。「時に張華司徒を領し、天下擧ぐる所凡そ十七人」とは、廣く在野に遺賢を發掘し登用すること、晉室の再建を計ろうとする張華の苦心の跡を物語るものである。

このような張華の努力が必ずしも酬われていない事實は、先にあげた韋忠傳の記事にあるように、推擧を受けた韋忠の側から張華にむけられた全否定の批判をふくめて、なによりも明白に、西晉の滅亡史がそれを語っている。とくに韋忠の痛烈な否定の論理は張華を賈后一派と同一視した彈劾で、その誤解をも含めて、當時張華が置かれていた複雑な政治的立場を知るうえで、重要な資料を提供している。これについていまここで詳細に觸れる餘裕がないので割愛し、當面のねらいである張華と西晉文學者との交流状態を具體的に考察することにする。

張華の周邊に集った西晉の文學者の内、何劭・摯虞は同輩にあり、別格的存在とみなし、のちほど扱うことにして、先ず寒門出身者の成公綏・左思・束皙をとりあげ、次に蜀吳の平定後、張華の知遇を得た陳壽・陸氏兄弟・褚陶に及ぶことにする。

文選に長笛賦・嘯賦を留めている成公綏あざな子安は、魏晉南北朝文學の上で賦家としての位置は頗る高い。彼は生來寡欲俊才であり、詩賦表現も綺美であったが、性質閑黙で聞達を求めず、その上貧しいときていたので、時人はその詩文を認めようとはしなかった。唯獨り成公綏の人柄を重じ、彼の文章を絶倫だと歎伏していたのは張華だけで、魏の正元二年太常博士になると、早速成公綏を同職に推擧している。その際、張華が書いた「移書太常薦成公綏」という推薦狀が残っている。そのなかで張華は「固より逸倫の殊俊、摯紳の檢式なり」（太平御覽六百三十二引文士傳）と絶讃している。時に張華二十四歳、成公綏二十五歳である。長笛賦・嘯賦・琵琶賦・琴賦と一連の音楽賦を著した成公綏は音律に長じていたとみえて、中書郎に遷って以後、傅玄・荀勗・曹毗・張華と共に晉世郊廟燕射・鼓吹舞曲等の篇章制作に名をつらねている。明の張溥が「子安は茂先の接塵を得て、其の人幸

甚なり」(漢魏一百三家集成公子安集題辭)と告げているのは、まことに當を得た評語といふべきである。

成公綏と同じ寒門出身者でありながら、やはり張華の助言と讚辭をえて、洛陽の紙價を高くするほどの文學的名聲をあげ、華々しく文壇に登場したのが左思あざな太冲である。もともと彼は齊國臨淄の小吏の子弟で、妹左棻の後宮入りという機會に恵まれ、京師洛陽に移住するまでは、自己の文學的才能に強い自信を抱いたまま、山東の片田舎に鬱屈していた貧しい無名の青年にしかすぎなかった。三都賦は京師移住直後から、構想に十年の歲月をかけて練り上げられたすえ、完成をみるが、時の著名な學者で高士の譽れ高かった皇甫謐の序文をえて、はじめて世人に重じられ、更に張華の「班張の流れなり」という評價を浴びて、洛陽の紙價を高からしめるほど、人々から傳寫されるようになったと晉書左思傳は傳えている。ところが、世説新語文學篇は皇甫謐に序文を書いて貰うことをすすめたのも張華であると記している。「左太冲、三都賦を作りて初めて成る。時人互に譏訾有り、思の意慚らず、後に張公に示す。張曰く八此れ二京と三たるべし。然れども君の文は未だ世に重ぜられざれば宜しく高名の士を經るべし」と。皇甫謐の死は太康三年(二八二)である。左思兄妹の京師移住期の泰始八年(二七二)に十年の構想習作の時日を加算すれば、太康二年に三都賦は一應の完成をみている。張華はこの時すでに、吳征討の功により、關内侯・廣武縣侯尙書の爵位を相次いで受けていた。そのような高位にありながら、張華がなお左思に高士皇甫謐から序文を貰うことをすすめたことの眞偽は別として、この挿話には、西晉文化の貴族支配、それから生じた固陋な選良意識と排他主義、その文化的狀況に對應して寒門出身者の擁護にまわる張華の綿密周到な推舉の工夫がにじ

みでいて興味ぶかい。

張華の推舉をえて太康文壇に躍り出た寒門出身の文學者には、この他、束皙あざな廣微がいる。束皙は若年の頃作つた勸農賦が鄙俗な文辭だと低い世評を受けたため、長らく沈滞していた。もとより榮利を慕わぬ彼は客難に擬して女居釋を作り、これが張華の目に奇とつり、召されて華の掾となる。時に束皙三十五歳で張華六十四歳の晩年期にあたる。

時期的に前後するが、三國志の作者、陳壽あざな承祚がその才能を張華に發見されたのは、蜀平定の景元四年(二六四)からほど遠くない時期である。蜀に於ける陳壽は觀客令史の職にあり、獨り蜀の宦人黃皓の專權に屈從せず、譴黜されたほどの豪直の士であった。その豪直さが災いしてか、晉書陳壽傳は「蜀平ぐに及び、是に坐し沈滞すること累年」と傳えており、或はこのとき國事犯として暫く幽囚の身となつていたのかもしれない。それにもかかわらず、陳壽のなかに異才を認めた張華は彼を貶棄せず、まず孝廉にあげ晉の佐著作郎にすすめていた。この職についた陳壽はまず諸葛亮集二十五卷を撰し、ついで三國志六十五卷の大著をもつにして、時人に良史の才と稱讚されるようになる。晉書陳壽傳によれば、三國志の完成を喜んだ張華はさらに晉書を書き繼ぐように彼を激勵したといわれているが、これは果されてない。

蜀の平定で陳壽を發見した張華は、吳の征討後に、陸氏兄弟を獲て驚喜している。「太康の末に至り、弟雲と俱に入洛し、太常張華に造る。華は素より其の名を重じ、舊く相識るが如し。曰く八伐吳の役、利は二俊を獲しことなり」と(晉書陸機傳)。洛陽では南方人士にたいする蔑視の空氣が支配的であつたという記事は晉書にしばしばみうけら

れる。そのなかで、獨り張華は陸機を諸公に推薦し、太傅楊駿の祭酒につけてゐる。陸機を遇することにこのように厚かつた張華はまた彼の詩文の最もよき理解者でもあった。そのことは「人の文を作るや不才に思ふ。子の文を爲るに至つては乃ち太だ多きを思ふ」(世説新語文傳學篇注引文章)と陸機の詩文を批評しているなかに、尖銳にあらわ

れている。東晉の孫綽が陸機の文は「沙を排して金を簡ぶが如く、往々にして寶を見る」(世説新語文學篇)と評しているように、華麗な詩文の制作者として陸機は當時すでに定評をえていた。この華麗さが多才に走る弱點をみてとり、そこをついたのが張華の批評であつた。この批判的視點にたつものに、陸機詩文を最もよく熟知していた弟陸雲あざな土龍がいる。陸雲は兄に與えた書狀の中で「文賦」が妙絶な綺語に覆われ、却つて本意を盡していない憾みがあること、またさらに詩文の制作が多いことは自分の家に澤山豚を飼つていることと同じで自慢にならぬと、陸機の多才を揶揄している。

陸雲に關して「土龍は明練以て檢亂を識る。故に能く采を布きて鮮淨。短篇に敏る」(文心雕龍才略篇)といわれている如く、文辭が鮮淨清省であることが、文學表現の要諦であると考えていた。そして興味深いのは、その範例を張華の詩文に求めていることである。陸雲の「與兄平原書」は「張公の文は他と異なる無し。正しく自ら清省にして煩長なし。作文の正にして自ら復た佳なり」(全晉文卷百)と告げていることがそれである。

この陸氏兄弟とともに、吳の出身で張華の座に集つた人物に、晉書文學傳に收められている尙書郎・褚陶あざな季雅がいる。その傳には「張華は之(褚陶)を見て陸機に謂ひて曰く、八君兄弟は龍にして雲津に躍り、顧彦先は鳳にして朝陽に鳴く。謂らく東南の寶已に盡く

と。意ざりき後に褚生を見るとは√とあり、褚陶を識つて喜ぶ張華の氣持がこの言葉のなかにそのままつたえられている。

この他、張華に關係ある西晉文學者の中で、何劭・摯虞になると、とりわけは別格的な存在である。なぜなら彼等は張華の同輩であり、當時にあつては政治的・文學的に一流の地位にあつたからである。この二人と摯虞との親交を窺うに足る資料として、張華に「贈摯仲治詩」「答何劭詩」、何劭に「贈張華」等の詩編が現存している。特に摯虞については、「(張華)雅に書籍を愛し、身死するの日、家に餘財無し。惟文史のみ几篋に溢ふれぬ。嘗つて居を徭すに書を載すること三十乘。秘書監摯虞、官書を撰定するに皆華の本を以て正を取る。天下の奇秘、世に希有する所の者は悉く華の所に在り」(晉書張華傳)という記事があり、これを見ると摯虞の文章流別集三十卷の編纂も、張華の藏書にもとづいた仕事ではなかつたかと想像される。張華の刑死後、齊王冏に箋を奉つり、張華の名譽回復をはかつたのはほかならぬこの摯虞であつた。

現在、張華には「相風の賦」と題する作品が残っている。これは「風を辨じ方を候ひ、必ず立ちて唯極むるのみ。物に循ひて器に假の飾り無く、修き幹の迢迢たるに、眇し、高き墟を凌いで莖植す。……既に高きに在り(とと貝ト)、又險を戒めて自ら箴む。廻易の常無きと雖も、終に正を守りて淫せず、永に恪しみ立ちて世を彌る」と、自己の生き方を伺風鳥に託してのべた好短賦である。「風を辨じ方を候ひ、必ず立ちて唯極むるのみ」の伺風鳥に、自己の寓喩を發見する精神が、非情にまで自己をつき放してとらえた存在規定は西晉文壇形成の端緒にあつた。文學の群才を發掘し庇護することにとめた張華の無償の行爲につながるものであつた。この時代、賈後の甥で權勢ならびなき賈

謚のサロンに出入し、才能を競い磨いた、世に西晋の二十四友と稱せられた文學集團がある。潘岳・石崇が賈謚の車塵を拜したというあの有名な話に具象化されているように、この文學集團には權力追蹤の密度がそのまま文學名聲の序列にかさなってくる性格が認められる。「器に假りの飾り」をつけ、「廻易の常無き」權力の集邊に、狂奔せねばならぬ宿命を背負っていた西晋の二十四友の圈外にあって、彼等の宿命の悲しさと弱さを張華はつぶさに見抜いていたにちがいない。權力の中樞にいて權力の魔に魅せられることを自戒し、孤獨な何風鳥の自己抑制を知っていた張華の下に參集した文學者たちは、そこでは賈謚のサロンと違って、權力の光輝に自己發現を曇らされることもなく、相互の對話を可能にする自由さがあつたにちがいない。そうであつてこそ、摯虞・何劭・成公綏・陳壽・陸機・陸雲・左思・褚陶・束皙といった西晋文壇の重要な、それでいて個性的な構成メンバーは、張華の濫い實のこもつた人間的空氣に觸れ、その的確な文學欣賞眼と豊かな文學的教養の沃土に、才能の芽を定着させることで、はじめておのがじしの文學的開花を可能にすることができたのである。

四 情詩の系譜

現存する張華の詩篇は、巨篇の樂府（輕薄篇遊獵篇）を含めて、三十二首を數えるにとどまる。このうち、文選に採録されるものは情詩二首、雜詩一首、勵志詩一首、答何劭詩二首、玉臺新詠に選録されるものは情詩五首、雜詩二首となつてゐる。この二つの總集の選擇はそのまま六朝時代に寄せられた張華詩への關心の傾斜と欣賞の動向を知らせるものである。例えば、樂の鍾嶸は「其の源は王粲に出ず。其の體華艷、興託寄ならず。巧みに文字を用ひ務めて妍冶を爲す。名は曩代

に高く疏亮の士なりと雖も、猶恨むらくは兒女の情多く風雲の氣少し。謝康樂云ふ、張公復千篇と雖も猶一體のごときのみ」と評し、張華を中品に位置づけている。この批評が張華の情詩・雜詩に焦點をあわせていることは「兒女の情多く、風雲の氣少し」などの評語からあきらかである。南齊の江淹が漢代から六朝の宋代にかけて、三十名の著名な詩人を選び、各々の發想と詩體の獨創性に着目し、模倣した「雜體詩三十首」のなかで、張華を「離情」の篇題で詠っているのも、張華詩の特徴を情詩・雜詩に認識する評價基準が示されている。さらに張玉穀の古詩賞析、沈德潛の古詩源といった清代の總集に重點的に採録評價されているのは、いづれも情詩・雜詩である。このような張華詩評價は六朝文學の情況のなかで醗釀され、すでに不動のものとして定着されたといわねばならぬ。従來、張華の詩的世界を艷情詩の系譜に位置づけ、その樂府體の詩が展開している獨異な詩風を見落す過誤もまた文選・玉臺新詠等の總集が導いた鑑賞享受の方向に責任がある。

歷代總集の編者が張華の艷情詩を偏重する傾向のなかで、陳祚明の采叔堂古詩選だけは獨り趣きを異にしている。陳祚明は「張司空は範古を趣きと爲し、聲情透逸たり。蓋し繩墨の内に步趨する者なり。未だ千篇一體を以て之れを少ずべからず」（古詩選晉一）と論じている。この批評的觀點をつらぬいて、古詩選には樂府題の詩から、情詩・雜詩をふくめ、勵志詩・答何劭詩など現存する張華詩の重要な詩篇を殆んど網羅している。「聲情透逸たり、蓋し繩墨の内に步趨する者」とは、儒家的な發想と調和を張華詩に認める評語で、「兒女の情多く、風雲の氣少し。謝康樂云ふ、張公復千篇と雖も、猶一體のごときのみ」という詩品の批評に、意識的に反論を加えていることは明白であ

る。

黃子雲も「野鴻詩的」で、「茂先、氣を失ひ餒にして健ならず、其の雍和溫雅、中規中矩なるは頗る儒家の氣象有り。情詩・雜詩等の篇、康樂一體の譏を免れざるも、餘は勵志詩什の如く一概以て之を掩ふべからず」(昭代叢書王集)とのべている。儒家の氣象といわれ、儒家的發想・調和と考えられるものは、張華の生涯の歩みを顧ればそなわるべくして具わった必然と知ることができる。非命の最後をとげるまで、彼は現實參加の儒家的態度を保持しつづけたからである。陳祚明が「眞率、自ら情眞を序ぶ。故に取るべし」という「答何劭詩」三首は、この持續の過程で苦惱と矛盾を背負う張華の内面をもっとも眞率に表白している。そのなかから斷片的に拾えば

吏道何其迫

窘然坐自拘

纓綏爲徽纆

文憲焉可踰

恬曠若不足

煩煥每有餘

吏道何ぞ其れ迫れる

窘然として坐ら自ら拘る

纓綏は徽纆と爲り

文憲は焉ぞ踰ゆべけん

恬曠は足らざるに苦しむ

煩煥は毎に餘り有り

(答何劭詩第一首)

道長苦智短

責重囚才輕

周任有遺規

其言明且清

負乘爲我戒

夕惕坐自驚

道長く 智の短きを苦しむ

責重く 才の輕きを困しむ

周任に遺規有り

其の言明にして且つ清し

負乘をば我が戒と爲し

夕るまで惕れ坐に自ら驚く

(答何劭詩第二首)

などの詩句が端的にそれを示している。論語季氏篇の「周任言へる有り。曰く力を陳べて列に就き、能はざれば止む」と、周易繫辭上傳の「負ふて且つ乗り、寇の至るを致す。負ふとは小人の事なり。乗るとは君子の器なり。小人にして君子の器に乗れば、盜之を奪はんことを思ふ」に典據するほかは、頗る明白な措辭である。ここまで眞率におのれを語って、過度な修辭とてらいを廻避できたのは、自己を律するに嚴しい張華の人生觀からきた内在律によるものである。第三章でふれた如く、張華に親しく接した陸雲が「張公の文は他異無し。正しく是れ清省にして煩長無し。作文の正にして自ら復た佳なり」(全晋文卷百)と評しているのは、張華の全人間的な行動生態と、創造の領域に屬する文體との間に、一次元的な因果律を認める發言である。更に、張華の朋友で「在昔班司を同じうし、今者は園廬を比べ」た何劭は「既に貴くして儉を忘れず、有に處りて能く無を存す。俗を鎮むるは簡約に在り、樹塞すること何ぞ暮るに足りん」(贈張華詩)と、張華の清約謙虛な生活態度を頌している。晋書本傳にも、これらの資料に結論をあたえるかのように、身は宰相の位にありながら、家に餘財なく、唯文史のみ几篋に溢ふれていた事實を記録する。

張華が國家補弼の重責を荷うに至った元康年間には、既に西晋王朝が衰滅の危機に瀕していたことは、いくどかのべた。先にあげた「答何劭詩」三首はこの時期の制作である。「吏道何ぞ其れ迫れる、窘然として坐ら自ら拘る」の詩語が生きた實感の音色をひびかせるのも當然であった。冠の纓は人を縛る索とみなし、文憲に踰えがたい不自由を認知しながらも、彼は西晋中興の使命感から吏道に自らを金縛りにしていたのである。張華が魏晉政權交替期の危機狀況のなかで、小宇宙の自足安住の境地を求め、生きる方法を卑小陋劣な鷓鴣の存在に托

したモチーフとの背離が、彼に非業の死を招いたと非難することはたやすい。おそらく張華は「鷓鴣の賦」で表明した處生の方向を自ら否定したのであるまい。むしろそれが終生の信條として秘かに抱懷されていた證據に、晩年の制作になる「答何劭詩」に「衰疾は辱殆に近ければ 庶幾くば並に興を懸けんことを。髮を重陰の下に散らし 杖を抱いて清泉に臨み。耳を屬けて鸚鳴を聴き 目を流して鱸魚を翫ぶ。従容として餘れる日を養ひ 樂しみを桑榆に取らん」という老莊風の内の自然に生きることが、張華の切實な希求として持續していたことを知る。唯彼がその希求を安直に自己に許容しなかったのは、あまりにもひどい西晉社會の混沌と腐敗の状況を坐視するに忍びなかったためである。人生はつねに豫測をこえて運命を生む。張華の人間としての責任がその政治的立場とからんで、現實の要請に誠實な反應を示すかぎり、押寄せる時代の動向がたとえ不如意なものであっても、その動向に自己の運命を賭けることに耐える方法しか、彼自らの撰擇の道はなかつたのである。

その意味で、儒家的氣象の典型的作品として勵志詩をあげる評家の指摘は、濟世をめざす現實參加の窮極の場である政治が逆に人間であることの自由を疎外するものであることを、事實として認定せねばならなかつた張華の苦惱と矛盾にみちた人間像（答何劭詩）を、拾象してしまふきらいがある以上、必ずしも讚成できない。勵志詩はその篇題が示唆するとおり、儒家的發想による勸學をその内容としており、その發想の規制をうけ、意識的に直截な四言の表現形式を用い、自己の經驗的な人生からくみ上げられた睿智に集約的な表現をあたえている。それでいて、勵志詩に、この種の發想がおちいりがちな道德詩のおしつけがまじさがなく、形式に調和した古朴清麗な筆觸が目立つの

は、それが自然にむけられた詩人の謙虛なまなざしから内發した言葉であり、そのまなざしを通して自然が人生に語りかける靜謐な省察の哲學にささえられていたからである。

自然の光景が、詩的審美にまで結晶した詩句の出現は、巨視的或は微視的な角度から、自然の造形に精神をこらした西晉の詩人たちに待たねばならぬ。陸機は「文賦」で「中區に佇みて以て支覽し、情志を典墳に頤ひ、四時に遵つて以て逝くを歎き、萬物を瞻て思ひ紛る。落葉を勁秋に悲しみ、柔條を芳春に喜ぶ。心は懷懐として以て霜を懷き、志は眇眇として雲を望む」とのべている。ここでは三墳五典といった古代聖賢の經典と同質において、自然への參入と眞摯な觀察が人間の情志を涵養することになると考える確信めいた態度がある。古代において畏敬の對象であつた自然は、すでに六朝末期の文學には類くない美的享樂の對象となつてゐる。その過渡期にあたる後漢末から晉宋にかけては、自然と人間との間に知的な交感が眞驗に問題になり、その交流を経験的に追求し、形而上學の論理にまで構築した畫期的な時代であつた。嵇康の養生論・陸機の文賦・葛洪の抱朴子・謝靈運の山水詩・陶淵明の田園詩など數多くの著述がそれを物語っている。したがつてこの時代、自然は單なる人事の比喩の段階をこえて、人間の存在を根源から照し出す對應性をもち、内部省察の哲學的契起となり、或は豊かな情感を醸造する發酵素となることができたのである。例えば張華の勵志詩も前者の典型であり、それ故にこそ内容からくる道德的臭味を脱脚することを可能にしたのであり、更にまた、彼の雜詩も、自然にあらわれた四季の變化が情感の領域においてふかめられる一つの範例を示している。

暑度隨天運 暑度天に隨つて運り

四時互相承

四時互に相承く

東壁正昏中

東壁は正に昏に中し

固陰寒節升

固陰は寒節に升る

繁霜降當夕

繁霜は當夕に降り

悲風中夜興

悲風は中夜に興る

朱火青無光

朱火 青くして光無く

蘭膏坐自凝

蘭膏 坐そに自から凝る

重衾無暖氣

衾を重ぬるも暖氣無く

挾纈如懷冰

纈を挾さむも氷を懷くが如し

伏枕終逢昔

枕を伏して逢昔を終へ

寤言莫予應

寤言するも予に應ふるなし

永思慮崇替

永く思ひて崇替を慮り

慨然獨撫膺

慨然として獨り膺を撫つ

劉勰が文心雕龍明詩篇で「五言は流調にして清麗を宗に居く。……

(張)茂先は其の清を變らし、(張)景陽は其の麗を振ふ」とのべているが、この雜詩は自然の變化と、それにもなう清淨な絳景が感性の領域で交錯する微妙な陰翳をくまなく描寫している。張華の雜詩は三首あり、これはその内の一首であるが、玉臺新詠が情詩にちかい他の二首をとり、この一首だけを意識的にはずし、文選がこの一首のみをあげるのも總集編者の選擇基準をあざやかに對照するものであり、その意味でも興味ぶかい詩である。

張華の詩篇で、ひとときわ光彩を放っているのは、陸機もそうであるが、對句の構成美であり、疊韻・雙聲の繁用である。樂府では輕薄篇、情詩では其の第三首に、それが主題との緊密な關係をもちながら特徴的にあらわれている。輕薄篇は總句數六十句の内、三十六句まで

が對句。これを分析すれば、發句から十八句まで都會遊閑の貴公子達の放恣豪華な生活を寫して、完全な對句を構成している。

| | |
|-------|--------------------------------|
| 末世多輕薄 | 末世に輕薄多く |
| 驕代好浮華 | 驕代には浮華を好む |
| 志意既放逸 | 志意既に放逸 |
| 貲財亦豐奢 | 貲財亦た豐奢 |
| 被服極纖麗 | 被服は纖麗を極め |
| 肴膳盡柔嘉 | 肴膳は柔嘉を盡す |
| 僮僕餘梁肉 | 僮僕も梁肉を餘し |
| 婢妾蹈綾羅 | 婢妾も綾羅を蹈む |
| 文軒樹羽蓋 | 文軒は羽蓋を樹て |
| 乘馬鳴玉珂 | 乘馬は玉珂を鳴らす |
| 橫簪刻玳瑁 | 橫簪には玳瑁を刻み |
| 長鞭錯象牙 | 長鞭には象牙を錯 <small>まじ</small> ふ |
| 足下金鑄履 | 足下には金鑄履 |
| 手雙中莫邪 | 手中には雙莫邪 |
| 賓從煥絡繹 | 賓從 煥として絡繹たり |
| 侍御何芬葩 | 侍御 何ぞ芬葩たる |
| 朝與金張期 | 朝には金張の期 <small>あつ</small> かに與り |
| 暮宿許史家 | 暮には許史の家に宿る |

彼等が歡樂を極める酒宴の狀景を描くまゝに、華かな歌舞の展開をやはり對句で綴っている。

| | |
|-------|----------|
| 北里獻奇舞 | 北里 奇舞を獻じ |
| 大陵奏名歌 | 大陵 名歌を奏す |
| 新聲險激楚 | 新聲は激楚を踰へ |

妙妓絶陽阿

妙妓は陽阿に絶る

玄鶴降浮雲

玄鶴は浮雲より降り

鯉魚躍中河

鯉魚は中河に躍る

墨翟且停車

墨翟すら且く車を停め

展季猶咨嗟

展季も猶咨嗟するがごとし

この詩句の段には、なかならず典故が頻繁に練り込まれているが、いづれも巧みに主題のなかに溶解している。輕薄篇の内にながれる音樂的律動感は、このような對句構成から生じたものであることはいうまでもない。郭茂倩が指摘する如く、本來、この歌辭が結客少年場行とおなじく、馬にまたがって唱ったものであるとすれば、そのことが自然に對句のリズムを必要としたのであろう。

情詩第三首の場合は、全篇對句から構築されていて、それぞれの詩語、それぞれの詩句が強い緊密性を保ちつつ、旅立った夫を慕う獨り

寢の女の情感を切實悲痛な美にまでたかめている。

清風動帷簾

清風 帷簾を動かし

晨月照幽房

晨月 幽房を照らす

佳人處遐遠

佳人 遐遠に處り

蘭室無容光

蘭室 容光無し

襟懷擁虛景

襟懷に虚景を擁くも

輕衾覆空牀

輕衾は空牀を覆ふ

居歡惜夜促

歡に居りては夜の促きを惜しむ

在感怨宵長

感に在りては宵の長きを怨む

撫枕獨吟嘆

枕を撫でて獨り吟嘆し

縣縣心内傷

縣縣として心内に傷む

張華の情詩五首は男女の戀情を主題にしたもので、雜詩三首もその

魏晉南朝文學に占める張華の座標

類として二首、玉臺新詠に收められている。雜詩三首のなかでも、次にとりあげる第二首には、自然の光景が比興という表現方法の領域をぬけ出て、それ自體として詩的審美にまで結晶した例をみる事ができる。

逍遙遊春宮

逍遙して春宮に遊び

容與綠池阿

綠池の阿に容與す

白蘋齊素葉

白き蘋は素き葉を齊へ

朱草茂丹花

朱き草は丹き花を茂らす

微風搖兩若

微風 兩若を揺かし

層波動菱荷

層波 菱荷を動かす

榮彩曜中林

榮の彩は中林に曜き

流馨入綺羅

流れる馨は綺羅に入る

王孫遊不歸

王孫は遊びて歸らず

修路邈以遐

修路は邈として遐なり

誰與翫遺音

誰と與にか遺音を翫ばん

佇立獨咨嗟

佇立して獨り咨嗟く

この詩は結尾の四句に至って、はじめて遠く遊びにでて歸らぬ男を想う女の情思をのべたものであることがわかる。それまでの八句は自然の光景描寫で、その内、六句が對句を構成しており、女の嘆きを強調するために、その情感の暗さと對照的に、明るくはなやいだ自然描寫の美的構築が、作者のなかで明確に意識されている。

元來、情詩と題する詩は、玉臺新詠卷二に魏の徐幹の一首を留めているのみである。張華の五首はこれにつぐもので、晉代の文學的旗手にふさわしく、兒女の情を描いて獨創的であるが、そのうち「北方有織佳人」ではじまる第一首の詩句だけは、あきらかに曹植の「西北有織

婦」ではじまる雜詩第三首の詩句を意識的に踏襲模擬したとみられる部分がある。

(曹植の雜詩)

妾身守空房

良人行從軍

自期三年別

今已歷九春

孤鳥繞樹翔

嗷嗷鳴索群

(張華の情詩)

君子尋時役

幽妾懷苦心

初爲三載別

於今久滯淫

昔邪生戶牖

庭內自成林

翔鳥鳴率偶
草蟲相吟和

この對照がそのまま物語っているように、魏人の情詩が素朴な情感の流露であるのにくらべ、晉代張華のそれは、鍾嶸の評語にあるとおり、措辭が巧みで妍治になり、それだけ感情も繊細になっている。この他玉臺新詠に收める張華以前の艶情詩はおおむね樂府詩であり、民歌風の敘事性と素朴な歌振りの特徴としている。

清の孫月峰が、すでに張華の情詩について「古體の中情を述べて此の如き妍治なる者有らず。後世艶曲の祖なり」と批評している如く、南朝文人の創造に至って、豊かな綵りをあげる繊細巧緻な艶情の詩風は張華においてその第一歩が踏み出されたとみてよい。

この意味で、張華の艶情詩(情詩・雜詩)が同時代及び後世の詩表現の上に影響をとどめていると思われる痕跡のなかで主なものをあげれば、「荏苒日月運 寒暑忽流易 同好遊不存 迢迢遠離析」(張華雜詩第二首)の句は、潘岳の「荏苒冬春謝 寒暑忽流易 之子歸窮泉 重穠永幽隔」(悼亡詩)になつてあらわれ、「房櫺自來風 戶庭無行跡

兼葭生牀下 蛛蝥網四壁 懷思豈不隆 感物多所恨」(張華雜詩第二首)の句は、張協の「房櫺無行跡 庭草萋已綠 青苔依空牆 蜘蛛網四壁 感物多所恨 沈憂結心曲」(雜詩)となり、「東壁正昏中 固陰寒節升 繁霜降當夕 悲風中夜興 朱火青無光 重衾無暖氣 挾纈如懷冰」(張華雜詩第一首)の句は、王微の「孟冬寒風起 東壁正中昏 朱火獨照人 抱景自愁怨」(雜詩)となり、「清風動帷縑 長月燭幽房 佳人處遐遠 蘭室無容光 衿懷擁虛景 輕衾覆空牀」(中略) 撫枕獨吟歎 繻繻心內傷」(張華情詩第三首)の句は、沈約の「挾琴叢臺下 徒倚愛容光 佇立日已暮 戚戚苦人腸」(中略) 錦衾無燭暖 羅衣空自香 明月雖外明 寧知心內傷」(古意)の句にうけつがれ、更に江淹は「張司空離情」と題して、「秋月映簷櫺 懸光入丹墀 佳人撫鳴琴 清夜司空唯 蘭徑少行跡 玉臺生網絲 夜樹發紅彩 閨草含碧滋 羅綺爲君整 萬里贈所思 願垂湛露惠 信我皎日期」という詩歌を、張華の艶情詩に擬して制作している。これらは張華の措辭・歌振りを範例とするもので、彼の表現遺産が六朝文人詩の上で繼承されてゆく過程を示すものである。

これまでみてきたように、歴代の張華詩賦批評は情詩・雜詩、つまり艶情詩に彼の詩の代表的性格を認めようとするもの、或はその評價を否定し、張華の儒家的氣象を推賞するものと、さまざまであるが、張華詩賦の思想的性格はその多面性に特質があるとみるべきであろう。すなわち、儒家的氣象は勵志詩・答何劭詩・永懷賦に、老莊的氣風は遊仙詩・招隱詩・贈擊仲治詩・答何劭詩・歸田賦・鶴鷄賦に、情愛を主題とするものは情詩・雜詩・感婚詩に、遊俠遊閑の徒や壯士の生き方への共感は遊俠篇・輕薄篇・博陵王宮俠曲・壯士篇等の樂府雜曲歌辭に及んで、その詩風は複雑である。

この章で多少なりとも検討してきた如く、張華自らは現實には儒教的な羈伴に身を投じて行動し、その意圖から出た詩をつくりながら、そのみではみだされぬ心情を老莊思想に托し、隱棲閑居を希求し、非現實的な遊仙の幻想世界を夢みて調和と均衡をはかり、現實の羈伴に埋没し、涸渇しがちな情感の世界を、みずみずしく掘りおこす作業をも怠らなかつたのである。次の章では、此の矛盾ともみられる複雑な多面性をさらにふかめるために、張華の詩篇のなかで、情詩、雜詩とともに重要な作品群をなしながら、これまで看過されがちであつた一連の遊俠樂府をとりあげ、それが持つ思想的意義と、後世文學にそれが占める位置について、いささか考察をくわえることにする。

五 遊俠樂府の世界

晉代樂府詩の主要な擔い手は、陸機・傅玄・張華の三詩人である。陸機が樂府に托して自己の志懷を繰り廣げ、傅玄が樂府の擬古制作に情性の微妙な動き寫していたとき、張華は遊俠壯士の世界に題材を求め、雜曲歌辭にあらたな領域を開拓している。遊俠篇・博陵王宮俠曲・壯士篇のいづれをみても、男だてに生死を賭ける遊俠の徒にたいする頌歌であり、或は都會遊閑の士の豪奢放恣な生活態度にたいする共感歌である。こころみに博陵王宮俠曲の第二首をあげてみよう。

雄兒任氣俠
聲蓋少年場
借友行報怨
殺人租市旁
吳刀鳴市中
利劍嚴秋霜

雄兒氣俠を任んじ
聲 少年の場を蓋ふ
友に借して報怨を行ひ
人を殺して市旁に租ふ
吳刀 手中に鳴り
利劍 秋霜よりも嚴し

魏晉南朝文學に占める張華の座標

| | | | | | | | | | | | |
|-----------|-----------|--------------|--------------|-------------|-----------|-------------|------------|--------------|-------------|------------|-----------|
| 腰間叉素戟 | 手持白頭鏢 | 騰超如激電 | 廻旋如流光 | 奮擊當手決 | 交屍自縱橫 | 寧爲殤鬼雄 | 義不入圍牆 | 生從命子遊 | 死聞俠骨香 | 身沒心不懲 | 勇氣加四方 |
| 腰間には素戟を叉し | 手に白頭の鏢を持つ | 騰超すること 激電の如く | 廻旋すること 流光の如し | 奮擊 手に當るれば決り | 交屍 自ら縱横たり | 寧しる殤鬼の雄と爲るも | 義として圍牆に入らず | 生きては命子の遊びに従ひ | 死しては俠骨の香を聞く | 身沒しても心は懲りず | 勇氣 四方に加はる |

この曲は郭茂倩の樂府詩集では、雜曲歌辭の遊俠篇に編入されているが、血氣盛んで俠氣に富み、生より義を重んじた長安の少年達を主題にあつかっていることでは、曹植の結客篇にはじまる數多くの作者の手になる結客少年場行と同じ類いである。

遊俠篇という篇題はそもそも張華によつてもうけられたもので、彼には別に同題の作品がある。郭茂倩は「漢書遊俠傳に曰く、戰國の時、列國の公子、魏に信陵有り、趙に平原有り、齊に孟嘗有り、楚に春申有り。競ひて遊俠を爲し、以て重を諸侯に取り、名を天下に顯す。故に後世遊俠を稱ふる者は四豪を以て首と爲す」(樂府解題)と、遊俠篇の由來をのべている。張華の遊俠篇も戰國四卿のいさおし振りを歌っているが、必ずしも四卿を稱えたものではない。

孟嘗は東のかた關を出で 身を濟ふは鷄鳴に由る。信陵は西のかた魏に反り 秦人兵を窺はず。趙勝は南のかた楚に詛ひして 乃

ち毛遂と與に行けり。黃歇は北のかた秦に適き 太子選りて荆に入る。善き哉遊俠の士 何を以て四卿を尙ばん。我は則ち是と異なり 古を好みて老彭を師とせん。

問題は善哉以下の四句にあり、この結句に留意すれば、必ずしも稱讚の對象たる善きかな遊俠の士が誰を指しているか定かではないが、此の詩のモチーフが歴史に名をのこした四卿にむけられたものでないことだけはたしかである。そして「我は則ち是れに異なる」という張華には、稱讚の對象たる遊俠の世界と、老莊を慕う自己の生活信條との間に横たわる明確な距離が測定されており、それが意識的な彼岸の表白である故に、張華の遊俠の徒への共鳴を深める結果になつてゐる。壯士篇にも同じ發想のパターンがみられる。△憤激を懷く▽壯士にたいして、△虚冲▽を守ろうとする作者の生活信條と相渉ることのない距離感を客觀的に描くことによつて、壯士の高い氣概にむけられる作者の憧憬を一段と強くしている。

輕薄篇という篇題も張華にはじまる。郭氏の樂府解題によると「肥馬に乗り、輕裘を衣ひ、驅逐經過して樂を爲す。少年行と意を同じうす」とあるが、余冠英などは宋書五行志に記録される晉の惠帝時代の史實をあげ、當時の貴族の荒淫な生活を暴露した諷刺詩が、張華の輕薄篇であるとみている。

「末世に輕薄多く、驕代には浮華を好む」という起句を除いては、この輕薄篇は都會遊閑の貴公子達の豪華な生活姿態、放恣な歡樂振りを風俗繪卷風に、美的効果とリズム感をねらつての對句を連ねて描寫し、最後は次の様な作者の感懷で結ばれている。

留連彌信宿 留連して信宿に彌るも
此歡難可過 此の歡過すべきこと難し

| | | |
|-------|-------------|--------|
| 人生若浮寄 | 人生 | 浮寄の若し |
| 年時忽蹉跎 | 年時 | 忽ち蹉跎たり |
| 促促朝霧期 | 促促たる朝露の期 | |
| 榮樂遽幾何 | 榮樂 | 遽に幾何ぞ |
| 念此腸中悲 | 此れを念へば腸中悲しむ | |
| 涕下自滂沱 | 涕下りて自ら滂沱たり | |
| 但畏執法吏 | 但畏る法を執るの吏の | |
| 禮防且切磋 | 禮防且つ切磋なるを | |

この輕薄篇を「通首華辭にして警句姿有り。餘語並びに能く古雅。……大いに是れ佳作なり」（采叔堂古詩選晉紀一）と評した陳祚明は、「末段の感慨情に入り、結びは復之を禮正に歸す」（同上）とのべ、あきらかに、禮正復歸に鑑誠の意圖を讀んでいる。はたしてそう讀めるであろうか。

「但畏執法吏 禮防且切磋」という結句のなかの禮防とは禮法の拘束を意味する。この結句に收斂される作者の感懷は、華美放埒な享樂にふける都會遊閑の貴公子たちが、執法吏の禮法に更にきびしく拘束規制され、ついに法の網にとらえられてしまふのではないかという危惧の念である。此の樂府には、短促な人生のなかで、△留連して信宿に彌▽つても、なお△盡し難い▽歡樂に身をひたす都會遊閑の人士の心境に、共感し同情し、秩序にはずれた放恣な歡樂に加えられる暗い禮法の拘束力にたいする憂慮にみちている。そこに余冠英のいう諷刺、陳祚明のいう禮正復歸の意圖は認めがたい。たしかに「末世多輕薄 驕代好浮華 志意既放逸 貲財亦豐奢 被服極纖麗 肴膳盡柔嘉」という起句は諷刺の意圖を感じさせるが、それとても、魏の曹植の名都篇の「名都多妖女 京洛出少年 寶劍直千金 被服光且鮮」と

いう起句と、發想の型が類似しており、兩篇の主題がそうであるように、華美放恣な都會人士の風俗恣態を描寫する際の常套的な發想法であつたとみるべきであらう。

輕薄篇はまた、楚の莊王が群臣と酒宴し、たまたま殿上の燭が消えたとき、群臣のうち後の衣裳を引くものがあり、后はその者の冠の纓を切取つて楚王にさがさせたが、楚王はあらかじめ群臣皆に纓を切らせてとがめなかつたという故事を用いて、酒宴狂亂の歡樂を次の様に描いている。

三雅來何遲 三雅(酒器)の來ること何ぞ遅き

耳熱眼中花 耳は熱し眼中花む

盤案互交錯 盤案 互に交錯し

坐席咸誼譁 坐席 咸誼譁なり

簪珥或墮落 簪珥 或は墮落し

冠冕皆傾邪 冠冕 皆傾邪く

酣飲終日夜 酣飲 日夜を終へ

明燈繼朝霞 明燈 朝霞に繼ぐ

絕纓尙不尤 纓を絶つも尙尤めず

安能復顧他 安んぞ能く他を顧みん

張華はこのように、都會遊閑の人士が日夜放恣な歡樂に身をひたすさまを、そのものとして緻密且つ精力的に追求しているが、此の異常な關心はどこからきているのか。それは結びに表白された作者の感懷が物語っているように、はかない人生に於ける歡樂を温くつつむ共感と、禮法の軌範意識からの逸脱、現行秩序の法則に拘束され、それに順應する生き方より、秩序から逸脱した頹廢の側に、より人生の眞實なるものの相を認めようとする立場が作者にあり、輕薄篇はその立場

から發想されているからである。

西晉の司馬氏が儒教を國としてより、清談すら儒教的色彩に染め上げられぬばならぬほど、禮教が支配的だったのが張華の生きた時代の實相であつた。このため、豪奢放恣・華美輕薄である生活態度が禮教的軌範からの逸脱を意味したのも當然であつた。しかしまた、鷓鴣の賦の章で觸れた如く、魏晉政權の轉換期に知識人が示した論理批判と恣意行動による禮教破壊は許るされなかつたが故に、豪奢放恣・華美輕薄であることが、そのまま絶對的な價値の轉換を儒教秩序に迫るから、をもちえなかつたことも、また事實である。唯、張華が同時代の清談家・裴頠のように、儒術を尊ばない時俗の放蕩を嘆くことなく、むしろかえつて、輕薄篇という樂府篇題の擬裝のもとに、禮教の拘束をはばかることなく、奢侈な逸樂放蕩に耽ける都會人士の頹廢した姿勢に、軌範意識からの逸脱を認識し、それに共感していることは注意されねばならぬ。しかも自らは儒教國是の政體の中樞部に參加し、非情な吏道の酷使に耐えていたのである。したがつて、張華の場合、はかなくとも充足した一瞬に生命を燃焼させる壯士遊俠の徒の氣慨への憧憬、盡しきれぬ歡樂放蕩に埋没する都會遊閑の貴公子への共感は、外部世界の秩序に順應する安穩な日常性に抗して、彼の心情倫理として内部で構築され抱懷されていた、生命燃焼の充實の美學と軌範意識からの逸脱志向の顯在を物語るものであつた。

張華の情詩・雜詩が南朝文人詩史の上からみて、艶曲の始祖という位置づけをこうむり、六朝宮體詩の先驅となつたと同じ意味で、彼の樂府が後世の樂府詩にあたえた影響も見逃すことはできない。例えば、王維の少年行に出てくる「縱死猶聞俠骨香」の句は、張華の「死聞俠骨香」(博陵王宮俠曲)の句をそのまま踏襲し、また輕薄篇・遊獵

篇・壯士篇・遊俠篇などの篇題はすべて張華の創造にはじまるもので、樂府の雜曲歌辭の分野で彼が開拓した領域は廣く深い。試みに張華の篇題にならって、同じ篇題の樂府を作った詩人をあげれば、輕薄篇では何遜・孫正見・李益・僧休・僧齊己・孟郊、遊俠篇では王褒・陳良・崔顥・孟郊・王筠・李白・元稹・溫庭筠、遊獵篇では劉孝威・李白、壯士篇では賈島・劉禹錫・鮑溶・施肩吾がいる。

結 語

これまでもつばら張華が魏晉南朝文學・思想のなかで占める位置づけに力點をおき、それを可能なかぎり檢證することにとつとめてきた。そこであらためて、張華の文學所産の多面性を、彼の生活と思想の側から總體的に要約して、この論稿を終りたいと思う。

張華は處女作「鷓鴣の賦」で、魏晉の政治的轉換期に、權力との對應のなかであられた危機の意識を、孤獨な内部の道をつうじて文學の世界に結晶させる作業を中途において放棄し、その主題を小宇宙の世界に自足安住する思想的傾斜に向つづけることで、流俗との結託を約束したといえる。果して彼は晉室の官僚機構に繰り込まれる過程で、自己の才能を最大限活用するという積極性を示すことになる。この時すでに「鷓鴣の賦」に於ける魏晉特有の莊子の小宇宙の思想は、張華自らの手で破碎されねばならぬ矛盾に逢着していたのである。人間としての誠實さが濟世の志向をとり、そこに自己の肉體と才智を傾むけることで、しだいに權力の中核に参加してゆくにつれ、張華の内部ではその矛盾は益々増大したといえる。元康年間、彼は腐敗した西晉國家の再建に碎身したが、腐敗の癩細胞となつていた賈后一派の權力との決定的な對決を廻避した事實がある。「相風の賦」で「風を辨

じ方を候ひ、必ず立ちて唯極むるのみ」の伺風鳥の存在に、孤獨な自己の精神像を發見し、「廻易の常無き」權力の生體と、自己存在の認識との間に距離を測定し、自己抑制の箴諷を托したのも、この矛盾の偽らざる表現であつた。

張華の文學が儒家的志向と老莊的希求との間をゆれ動き、兒女の情愛をうたう情詩から、遊俠壯士の慷慨、遊閑の貴公子達の享樂に共鳴する樂府詩に至るまで、大きな思想的振幅を展開してみせたのも、増大してゆく内部矛盾に耐えることで、自己を非業の死にまで追いやつていった人間が、内部創造の上でたどらねばならなかつた必然であつたといえる。

註(1) 太平御覽五百九十七に引く張華別傳に「華兼中書侍郎、從行(鍾會征討)、掌軍中書疏表檄、文帝(司馬昭)善之」とある。

(2) 唯、鄭振鐸の「中國文學史」だけは太康文學の盛況を招いた功績ある文學者としてその評價は高い。彼は詩品及び謝靈運の張華評價に反論を加え、張華の作品は「意未必曲折、辭未必絕工、語未必極新穎、句未必極穠麗、而其情思却終是很懇切坦白、使人感動的」と、文學史家の常識的評價と違った立場で、張華の詩篇を賞讃している。

(3) 鷓鴣の賦が阮籍の目にとまる機會は、偶然的邂逅によつて來たものと考えより、その機會を得るまで、此の張華と阮籍の間にはなんらかの關係があつたと考えるほうが妥當であらう。この推測に立つて、現在其の資料を史書に求めれば、建安十年代、阮籍の父なる阮瑀が司空軍謀祭酒として同僚の陳琳とともに、書檄で有名を馳せていたとき、同じ曹操の幕下にあつて、張華の奇才を認めて女婿とした魏の驍騎將軍劉放は司空軍事をつとめ、書檄を善くしたという三國志の記事が注意を引く。これから張華・阮籍をつなぐえにしをたぐることもできるが、これはあくまで傍證の領域を出ないので註に留めることにした。

(4) 唐長儒の「魏晉南北朝史論叢」は「曹爽の禍により、名士殺されを著多く——魏晉の政權は儒族司馬氏の手操られた。司馬氏の政權の基礎は大族名門の出であること、特に儒學の世家であることに置かれていた。晉室の元勳である潁川の荀顛・平陽の賈充・潁川の鍾會・東海の王肅・河東の衛瓘等はたいいてい皆、東海以來の學門であつた。だから、この集團は再び名教を提唱し、孝道を以て大族政治の方針とした」と論じている。

(5) 拙稿「阮籍詠懷詩考——孤絶の意識——」（九州中國學會報第六卷）を参照。「終身履薄冰、誰知我心焦」という詩句は阮籍詠懷詩其三十三にみえる。

(6) 劉勰の「文心雕龍」才略篇卷十の「張華短章、奔奔清嘯、其鶴鶴萬意、即韓非之說難也」を参照。

(7) 左思が張華と並んで通人と稱せられた記事は、抱朴子の殘闕文をとどめる唐の馬總編「意林」に「余嘗問嵇君道曰左太沖、張茂先、先可謂通人乎。君道答通人者聖人之次也、其間無復容」（四部及刊本）とある。三都賦類書説は袁枚の隨園詩話卷一にみえる。即ち「古無類書、無志書、又無字彙。三都兩京賦言木則若干、言鳥則若干。必倚搜摭羣書、廣採風土、然後成文。果能才藻富麗、便傾動一時、洛陽所以紙貴者、直是家置一本、當類書類志讀耳」と。

(8) 晉書張華傳「華少孤貧、自牧羊、同郡盧欽見而器之……盧欽言之於文帝、轉河南尹丞、未拜、除著作郎」という記事参照。張華を文帝に推舉したとき盧欽は散騎常侍大司農の職にあつた。

(9) 晉書韋忠傳の「裴蘆平陽韋忠於華。華辟之、忠辭不起。人間其故、忠曰張茂先華而不實。裴逸民每有心托我。我常恐其溺于深淵、而餘波及我。況可褻褻而就之哉」という記事参照。

(10) 晉書東晉傳參照。

(11) 陸雲の「與兄平原書」で「文賦甚有辭、綺語頗多、文適多體、復欲不

魏晉南朝文學に占める張華の座標

清」と論じ、また「有作文唯尙多、家多豬羊之徒」と揶揄している箇所を依る。

(12) 古詩源卷七に於いて、張華の情詩を評した沈德潛は、「穠麗之作、油然入人、茂先詩之上者。與葛生蒙楚詩同意」とのべている。

(13) 張華の招隱詩二首は「隱士託山林、遁世以保貞。連惠亮不遇、雄才屈不伸」。「棲遲四野外、陸沈背當時。循名掩不著、藏器待無期。義和策六龍、弭節越峻嶮。盛年俛仰過、忽若振輕糸」というもので、この詩をふくめて招隱詩の性格變遷を論じた小尾郊一氏は張華の招隱詩の中にある保貞陸沈の詩語から隱を支持する莊老の氣風を認め、張華から招隱詩が隱遁贊美の方向へすべりだしたと考えられている（中國文學に現われた自然と自然觀。頁一五三）。

(14) 余冠英は「樂府詩選」及び「漢魏六朝詩選」で輕薄篇の内容は當時の貴族の荒淫な生活の暴露であり、上半分は「浮華」を、下半分は「放逸」を寫しているとする。更に彼は宋書五行志の「晉惠帝元康中、貴遊子弟相與爲散髮保身之飲、對弄婢妾、逆之者傷好、非之者負譏」という記事を引き、つまりこれが、この詩の背景であると述べる。

姜亮夫の「張華年譜」も輕薄篇遊獵篇を元康七年の制作になるものと推定しているが、その根據は矢張り宋書五行志の記事であり、その時俗を貶したものとみる點では、余冠英と全く同じである。この兩者がいずれも輕薄篇を諷刺詩とみていることは解釋を誤っている。

(15) 曹植の「名都篇」について、余冠英は貴遊の子弟にたいする諷刺詩とする立場をとっているが、最近小西昇氏は「漢代樂府詩と遊俠の世界」（日本中國學會報第十五集）で、京洛の少年達の生活にたいする積極的な謳歌とみなし、そこに新しい美意識の萌芽を認めている。